

年間指導計画

時	テーマ	授業づくりの構想	授業のねらい
1	歴史と出会う	<ul style="list-style-type: none"> ・6月23日、沖縄の人びとが追悼の行事に参加し、平和の礎で、刻まれた名前を指でなぞり、あるいは魂魄の塔で献花する。そういう行為によって、戦火のなか、亡くなった人びとの姿を思い浮かべ、戦場となった悲惨に改めて思いをはせる。 ・以上のような「歴史への案内」で、生徒が「出会う」歴史とは、沖縄の人びとの心に刻まれた沖縄戦の様相であり、今の沖縄の人びとのところである。 	6月23日の沖縄の人びとの姿に接しながら、戦場で失われた家族への、人びとの思いを想像する。
2	歴史を楽しく学ぼう	<ul style="list-style-type: none"> ・小学校の歴史学習を振り返り、中学校の歴史学習との違いに気づき、楽しく学ぶ動機づけを行う。 ・興味ある人物やできごと、文化などを取り上げ調べる活動を通して、歴史学習への関心を高める。 ・歴史上の人物やできごとを、年表と関連づけて歴史の動きを大きくとらえる。 	小学校の歴史学習を振り返り、興味や関心が引かれた人物やできごと、文化などを思い出し、中学校で登場する人物やできごと、内容とどのような違いがあるか考える。
第1部 原始・古代			
第1章 文明のはじまりと日本列島			
3	(1) 木から下りたサル	<ul style="list-style-type: none"> ・「サルからヒトへ」と言われるが、サルはどうやってヒトになったのか。生徒が知りたいのはその「経過」なのだ。授業はその経過のなかで、決定的な契機となった直立二足歩行への道のりを実感できるようにすることから始めるべきだろう。 	ラミダス猿人は木から下りたとき、何をしようとしていたのか。なぜ直立二足歩行ようになったのか。想像を出しあい、それは人類の生活をどのように変えていったか考える。
4	(2) 種が落ちないムギ	<ul style="list-style-type: none"> ・農耕・牧畜のはじまりは人間の歴史において最も大きな変革であり、栽培植物は貴重な文化財である。世界の各地域や日本での発掘によって明らかになってきた事実を通して考えていきたい。 	野生のムギとはちがう種子が見つまっている。農耕や牧畜がはじまり人びとの生活はどうなったか。

5	(3) ピラミッドのなぞ	<ul style="list-style-type: none"> ・ピラミッドやミイラなどエジプト文明については、子どもたちもいろいろなことを知っている。何のために、どのようにして建築したかもさまざまな意見を持っている。それを授業の場で楽しく出しあい、説明しあいたい。生徒の関心に合わせて、写真なども準備できる。例示した授業展開例だけではなく、多様な展開を構想したい。 ・巨大な直方体の石を崩れないように積み上げるにはどのような条件が必要かを考えさせる。技術的な面だけでなく、それに携わる人間の動かし方やまとめ方、モチベーションの高め方とその維持、彼らの生活全般の側面から考えさせる。 ・遙か彼方の遠い昔の話ではなく、現在でも様々な調査や発見がなされており、その研究は、考古学のみならず最先端の科学技術が導入されていることを紹介して、生徒の関心を広げさせたい。 	だれがどのようにしてピラミッドをつくったのか。人びとはどんな暮らしをしていたか。
6	(4) ブッダになった王子	<ul style="list-style-type: none"> ・インドの古代文明を、仏教の成立と広がり主要教材とした授業にしたい。仏教に関しても、シャカ族の王子＝ブッダに焦点を当てて、その歩みを追っていく。アリア人の進出やアショカ王など、前後の事象は中心教材との関連で扱う。 	シャカ族の王子の歩みをたどりながら、ブッダと呼ばれるようになる経過、その教えに対する人びとの受け止めや広がりを探る。
7	(5) 地下から出てきた大軍団	<ul style="list-style-type: none"> ・中国古代文明を子どもが実感するためには、それを具現している歴史的な事象を詳しく見ていくことが求められる。その事象として秦始皇帝兵馬俑を中心に匈奴や万里の長城でそれを補う形の授業にしたい。 	陶製の兵馬俑軍団が、秦始皇帝の墓の近くに埋められていた理由、それが物語っていることを考えさせたい。匈奴との戦い・交流も関連させたい。
8	(6) 円形競技場の熱狂	<ul style="list-style-type: none"> ・地中海世界で文明を築いたローマ帝国を実感するには、文明の諸相や政治社会の構造からではなく、奴隷などここで生きる多様な人びとの姿から見ていきたい。地中海世界の先駆者ギリシアや、イエスの周辺の人びとも、それとの関連で登場させたい。 	たたかう奴隷たち、競技場で熱狂する市民たちなど、ここで生きる人びとの姿からローマ帝国に目を向け、その支配下でキリスト教が起こる様子を探る。
9	(7) 湖にゾウを追う	<ul style="list-style-type: none"> ・教科書 p.13 で学んだ氷河時代について、日本列島での様子を、野尻湖の発掘を中心にひもといていく。 ・“常識”にとらわれず、何万年も地中や湖底にあった化石を調査、分析することが、新たな歴史の発見につながったことを理解させる。 ・野尻湖の発掘調査団に参加した中学生が歴史の新たな発見者になったことを知り、本時の授業で、疑問に思うこと、もっと知りたいことなどを発表させて、歴史への主体的な学びの気持ちを持たせたい。 	野尻湖で不思議な化石が見つかった。人びとはそこでどんな生活をしていたのだろうか。

10	(8) かわる気候、めぐる季節	<ul style="list-style-type: none"> ・約1万2000年前に氷河期が終わった頃、日本列島の人びとが身近な自然の中で定住生活をはじめたことを理解させる。煮炊きのできる土器の利用で食料にできる種類が広がったことにも目を向けさせたい。 ・鳥浜貝塚の出土品をもとに、四季の変化の中で、人びとがどのように過ごしていたかをイメージさせ、旧石器時代との違いを理解させる。 ・長く続く縄文時代で、自然環境を利用した人びとの生活の厳しさにも気づかせ、次の時代につなげたい。 	縄文時代の遺跡から多くのものが発見された。人びとは、春夏秋冬にどのようなことをしたのだろうか。
11	(9) 稲作がはじまる	<ul style="list-style-type: none"> ・朝鮮半島南部から九州北部に水田稲作が伝えられ弥生時代がはじまった。水田稲作を伝えた人たちは、どんなものを日本に伝えたのか。 ・稲作が始まって、人びとのくらしや地域の様子がどのように変化したか考えさせる ・日本の様子が初めて中国の文献に記載されたことにもふれ、大陸との関係を考えるきっかけとする。 	水田で稲作がはじまった。稲作は人びとのくらしや社会をどのように変えていくのだろうか。
12	(10) 倭国の女王、卑弥呼	<ul style="list-style-type: none"> ・倭人伝にある卑弥呼の政治と倭人の生活を見る。記述には事実と理念が混在していることに注意する。 ・遡り、1世紀ごろの倭と漢の関係を金印などをもとに見ていく。3世紀に至る変化について考えさせる。 ・卑弥呼が魏へ使いを送った理由を考えさせる。大陸、朝鮮半島、倭が動乱の時代、遣使は国際情勢の変化に機敏に対応したものだだったことに気づかせたい。 	倭の卑弥呼はなぜ魏に使いを送ったのだろうか。東アジアはどのように変化していったか。
13	(11) 古墳を見上げるムラ	<ul style="list-style-type: none"> ・榛名山の噴火により埋没したムラの発掘や居館の遺構、前方後円墳などから、5・6世紀の東国が朝鮮半島とつながりをもっていることがわかる。 ・なぜ、東国の王が朝鮮半島とつながることができたのか、大和政権との関係から考えさせる。 	火山の噴火でうまっていたムラが発掘された。ムラの人びとはどんな暮らしをしていたのだろうか。ムラを支配した王たちは、他の地域や大和政権とどんな交流をしていたのだろうか。
第2章 日本の古代国家			
14	(1) ゆれる東アジアのなかで	<ul style="list-style-type: none"> ・仏教の導入によって、倭国の立場は東アジア諸国と交流・交渉、あるいは対抗しながら、それらの国々への激動、さらには倭国内の内乱を経て、古代国家形成に向かう歩みを、たどっていききたい。 	東アジアとともに歩む立場を明確にした倭国は、揺れ動く東アジアの情勢に、どう立ち向かっていくのか。倭国の歩みを追っていく。

15	(2) 奈良の都	<ul style="list-style-type: none"> ・各地の品物が次々と運ばれてくる様子は、新たな都平城京の成立を物語る。そこにはどんなしくみが機能していたか。さらに内外の動きに目を向けながら、この新たな都を観察していきたい。 	<p>新しい都・平城京に、各地から大量の品物が運ばれてきた。どんなしくみができたのか。国の内外にどんな変化が現れたのか、都の様子を観察する。</p>
16	(3) のしかかる租調庸	<ul style="list-style-type: none"> ・平城京が成立し、律令制による政治が展開していくと、各地の人びとの暮らしはどうなるのか、その様子を探っていく形にしたい。 	<p>口分田で働く人、都へ送るアワビを採る人、防人に行く人たちが、どんなことを話していたか想像させて、律令制下のムラの様子をイメージさせる。</p>
17	(4) シルクロードの贈りもの	<ul style="list-style-type: none"> ・平城京では、唐、新羅など対外関係でも、災害、疫病など国内を見ても、仏教で政治の安定を図ることが課題だった。仏教隆盛の政治的意図を、大仏開眼式典や、正倉院に納められた宝物・伎楽の面から、さらに鑑真の来日の意味から探らせたい。記紀編纂も、これとの関連でその政治的意図に気づかせたい。 	<p>大仏開眼式で演じられた伎楽の舞台・観客の様子を想像させ、鑑真来日の意味に触れて、仏教の展開で政治の安定をもとめたことに気づかせる。</p>
18	(5) インド洋へ、地中海へ	<ul style="list-style-type: none"> ・バグダッドの賑わい、イスラム教の成立と拡大、交易活動の様子、生み出された文化など、ムスリムの社会や人びとの活動に目を向けさせたい。 	<p>首都バグダッド、イスラム教、各地との交易活動、生み出された文化に目を向け、商人たちは各地でムスリムの暮らしをどう語っていたか想像させる。</p>
19	(6) 北で戦い、都をつくる	<ul style="list-style-type: none"> ・8世紀後半から11世紀前半にわたり、変容していく政治や社会の様相を、東北や地方の人びとと中央の関係を通してイメージできるようにしたい。 ・蝦夷の人びとが直面した戦争や自然災害をとおして、蝦夷の人びとの側から平安時代を見ていく。 ・桓武親政から摂関政治にいたる政治の変化・特色を見る。背景にあるイエの成立過程に気づかせたい。 ・尾張国郡司百姓らの訴え状を通して、地方政治と社会の変化、有力農民の成長について考えさせたい。 	<p>新しい都・平安京ができた。東北で、都や地方で、どんなことがおこなわれるようになったか。</p>
20	(7) 女性作家の登場	<ul style="list-style-type: none"> ・平安時代に生きる人びとの姿を実感するために、そこで生み出された文化に焦点を当てる。多様な分野のものを取り上げるのではなく、女性作家が登場した文学に絞って見ていく形にしたい。 	<p>源氏物語と枕草子について、女性作家たちが、かな文字で描こうとしたことを探り、平安時代に生み出した文学に触れさせる。</p>

第2部 中世

第3章 武士の世

21	(1) 交易で栄えた博多	<ul style="list-style-type: none">・大量の物資の運搬を可能にする航海術の発達によって、アジア各地の交易による結びつきは以前の時代と比べて飛躍的に深まり、国際関係を大きく変えていった。こうした時代の動きに注目させたい。・磁器の製造をはじめとして、当時の中国の経済、産業、科学技術は世界の最先端を行くものであったことに気づかせる。・その後の授業の中で、モンゴルの来襲が日本の征服よりも、通商の拡大を目的としていたことを理解させるための材料をあらかじめ示しておく。	大量の破損した磁器が発掘されたことを通して、博多に多くの中国人商人が住むようになった背景に、日本を取り巻く世界にどのような変化が起きていたかを知る。
22	(2) 都で、武士が戦う	<ul style="list-style-type: none">・8世紀末から地方豪族が武装していく過程を見る。背景に、俘囚の処遇があることに気づかせたい。・平将門の乱を例に、地方豪族とそれに従った人びとの姿を通して武士が成立する過程を理解させる。戦争がもたらす惨禍に気づかせたい。・中央の政治の変化を背景に、武士が成長し12世紀に平氏政権が成立した理由を考えさせる。・地方の武士は、政治の変化をどう見ていたか考えさせ、この時代の地域の歴史に関心を広げたい。	武士が登場した。どんな人たちだろう。武士はどのようにして力をつけていくか。
23	(3) 荘園の人びと	<ul style="list-style-type: none">・粉河寺縁起絵巻と紀伊国梓田荘の絵図は、12世紀午前末ごろの荘園と、そこに住む人びとのすがたを知ることができる貴重な資料である。これらをもとに、人びとの営みと社会の様相に迫りたい。・12世紀に、荘園公領制が進み、平氏政権でも財政的な基盤となることを見る。荘園の支配者が変化するなか、人びとが何を願っていたか想像させたい。・東北地方北部では荘園はうまれず、独自のうごきがあったことに気づかせたい。	農民たちが荘官の館に年貢を運んでいる。荘園はどのように広がっていったのか。
24	(4) 東国に幕府をつくる	<ul style="list-style-type: none">・平氏に負けて逃れてきた源頼朝に、東国の武士たちはなぜ従ったのか。この疑問は、鎌倉幕府の根幹である御家人制に通じるものだ。授業では、東国の武士たちが切実に求めていた所領を通して、鎌倉幕府成立の意味を考えさせたい。	各地で平氏政権に反対する内乱がはじまった。頼朝とともに挙兵した関東の武士や内乱に巻き込まれた民衆が、それぞれ何を願っていたのか考える。

25	(5) おどる聖と念仏札	<ul style="list-style-type: none"> ・万民平等思想ともいえる一遍の行動と教えを見ていく。女性や病人、貧しい人びとが、なぜ一遍と行動をともにしたか考えさせたい。 ・新しい仏教が生まれた背景に、大規模な内乱（教科書pp. 62～63）や飢饉、災害などの社会状況があったことに気づき、人びとが願ったものを考えさせたい。 ・『平家物語』『方丈記』などの文化と関連させる。 	南無阿弥陀仏と唱える教えはなぜ広まったのか。武士はどんな文化に接しどんな信仰を深めたか。
26	(6) 地頭が村にやってきた	<ul style="list-style-type: none"> ・阿テ河荘百姓訴え状は、荘園領主と地頭の二重支配のもとで人びとが直面した課題を、臨場感ある肉声を通して知ることができる貴重な資料である。これをもとに、人びとの願いや社会の様相に迫りたい。 ・訴え状が書かれたころの市を描いた『一遍聖絵』「福岡の市」を観察させ、流通経済の発展と基底にある生産力の向上や民衆の成長について考えさせたい。 ・訴え状を書いた百姓たちのその後を想像させる課題を通して、生徒が当時の社会をイメージし、地頭に対抗した百姓の力を考えさせたい。 	阿テ河荘の百姓が地頭を訴えた。なぜだろう。人びとの力は産業をどのように変えていくか。
27	(7) 一つにつながるユーラシア	<ul style="list-style-type: none"> ・元軍と日本軍の戦闘前後の状況に目を向けさせることによって、多角的に日元関係をとらえさせたい。 ・さまざまな宗教や民族を登用し、交通網を整備したモンゴル帝国のありようを学ぶことによってユーラシアが一つにつながったことに気づかせたい。 	クビライ＝カンはどんな国をつくろうとしたか。東アジアはどのように変わっていくのだろうか。
28	(8) 悪党の世の中	<ul style="list-style-type: none"> ・南北朝が互いに対立していたことで悪党の活動がさらに活発になった。南北朝の内乱が長引き、内乱に参加していた武士も故郷に戻れなかったり、所領を失うものも現れた。足利義満が南北朝の内乱を終わらせたが、悪党は室町幕府の命令に従ったか、考えさせたい。 	悪党とはどんな人たちか。内乱のなかで政治や社会はどのように変わっていくのだろうか。
29	(9) 境界に生きる人びと	<ul style="list-style-type: none"> ・倭寇と呼ばれた集団には日本列島をはじめ朝鮮半島、中国大陸各地のさまざまな人びとが加わっていた。倭寇は、室町幕府、明、朝鮮、琉球などの国家が確立していく過程でしだいにその活動地域が制限されるようになった。そして、明を中心とした冊封体制が東アジアで確立した。倭寇はどうしたか、想像させたい。 	倭寇とはどのような人たちか。東アジアの国々はどう対応したのだろうか。

30	(10)職人歌合の世界	<ul style="list-style-type: none"> ・「職人歌合」から室町時代の商工業者の姿を見る。油売り・大山崎神人の活動から、座のイメージを広げたい。灯りによる生活の変化にも気づかせたい。 ・帯座、扇座の女性の活動と、絹織物や扇など中国や朝鮮と結びついて発展した産業のようすを見ていく。経済の中心となった京都の特色を理解させたい。 ・今堀を例に、流通業などが農村から生まれたようすを見る。惣村での自治やおきてについて考える中で、社会の様相や人びとの願いに迫りたい。 	<p>「職人歌合」から人びとの声が聞こえてくる。このころ都市や村はどのように変わっていったか。</p>
31	(11)岩に刻んだ勝利	<ul style="list-style-type: none"> ・人びとが正長の土一揆のような大規模な行動をとることができるようになった背景には、一揆や惣村の存在がある。人びとは、なぜそのような共同体をつくりそのような実力行動に出たのか、考えさせたい。 ・中世は武士のみならず、あらゆる階層の人びとが実力によって物事を解決しなければならず、それゆえ「下剋上」や「戦国」という言葉に象徴される時代であった。そのような時代像を意識させ、生徒自身の言葉で表現させたい。 	<p>人びとが正長の土一揆のような軍事行動に出たり、村で一揆を結び戦乱へ加わったりしたのは、どのような願いからであったかを考える。</p>
32	(12)禅の文化、民衆の文化	<ul style="list-style-type: none"> ・応永の大飢饉の塗炭の苦しみの中、伏見荘の村々が結束して鎮魂行事を行い、盆踊りを誕生させた過程を見る。村の成長が生み出した行事・文化が、今日までの文化の基層にあることに気づかせたい。 ・禅僧がもたらした中国の最先端の文化を受容して、さまざまな禅の文化が生まれたことを見る。 ・中世の人びとは神仏への信仰を有していた。信仰の広がりや文学や美術、芸能などをさかんにし、豊かな文化を生み出したことに気づかせたい。 	<p>盆おどりに人びとはどんな思いを込めたのだろう。どんな民衆の文化、禅宗の文化が生まれたのか。</p>
33	(13)アジアの海をつなぐ王国	<ul style="list-style-type: none"> ・15世紀、アジアでは明の冊封体制にもとづく朝貢貿易が行われた。明が民間人の海外渡航を禁じたため（海禁）、その代わりに担う形で、新興国琉球が華人ネットワークに支えられ、東シナ海と南シナ海をつなぐ中継貿易で栄えた。世界史の中で琉球王国をとらえたい。 	<p>琉球王国の船がどこにどんな商品を選んでいったのかを追究し、中国、日本、東南アジアとの交易ネットワークのしくみを学ぶ。</p>
34	(14)銀と戦国大名	<ul style="list-style-type: none"> ・日本で大量の銀が産出できるようになり朝鮮や明との交易がますます盛んになった。生糸や絹織物を中心にした交易が日本に与えた影響を考えさせたい。 ・室町幕府の弱体化と相まって戦国大名が領国を支配し、産業を興す一方民衆を戦争に動員するようになった。領国内での戦国大名と民衆とがどのような関係だったか、考えさせたい。 	<p>石見の山中で大量に銀が産出された。このころ、日本、中国ではどんな変化がおきていたか、考える。</p>

第3部 近世

第4章 世界がつながる時代

35	(1) インドに出現した船隊	<ul style="list-style-type: none">・ポルトガル人のインド洋への進出を通じて、当時のアジアとヨーロッパの動きと、それを結びつけているインド洋貿易の役割を理解させる。・ヨーロッパにおけるキリスト教会内部の変化（宗教改革）と芸術や学問・科学技術（航海技術も含めて）の発達（ルネサンス）との関連で、キリスト教の日本への伝来の原因を考えさせる。	3隻のポルトガル船がインド洋に姿を現した目的はスパイスを手に入れることにあった。スパイスが何故、重要だったのかを考える。イエズス会の宣教師がポルトガル人の後を追ってアジアに姿を現すようになった理由を当時のヨーロッパ内部の動きと関連づけて考える。
36	(2) 大西洋の東と西で	<ul style="list-style-type: none">・中南米とアフリカ西岸へのヨーロッパ人の進出が与えた影響を、その地域に暮らす人々の立場から見たときにどのようなものであったかを理解できるようにする。・中南米は地球の裏側に当たり日本との関係も密接ではなく、生徒にとっても具体的なイメージに乏しい地域なので、日本人の生活とも関わりのあることを知り、身近に感じられるようにする。	ヨーロッパ人の来航以前から、中南米とアフリカ西岸の人々は独自の文化を創り出していたが、ヨーロッパ人の来航によって大きな被害を受け、苦しめられたことを知る。
37	(3) 倭寇がもたらした火縄銃	<ul style="list-style-type: none">・ヨーロッパと日本との出会いとしてとらえがちな火縄銃およびキリスト教の伝来について、当時の東アジア海域における国際情勢の視点から考えさせる。・火縄銃やキリスト教という個別の技術・思想の伝来としてのみではなく、それらが社会にもたらした影響、伝来後の交流についても考えさせる。	火縄銃が日本に伝わってきた。火縄銃は日本の社会にどんな変化をおこしたのだろうか。キリスト教の伝来もあわせて考える。
38	(4) 町衆と信長	<ul style="list-style-type: none">・祇園祭を再興させ、京都の町衆たちは自力をつけていった。彼らがどのような要求を持っていたか考えさせたい。・一向宗徒たちは、石山本願寺を中心に寺内町をつくり、自治を進めていった。彼らの要求が何だったか考えさせる。・こうした勢力に対して信長がどのような政策を取ったか、考えさせる。	京都に入り、「天下統一」をめざす信長は、どのような勢力と戦っていくのだろうか。
39	(5) 村に入ってきた秀吉	<ul style="list-style-type: none">・豊臣秀吉は、1582年から大々的に検地を実施し、大名たちの領地を統一的に把握しようとした。しかし江戸時代に行われた検地とは違って、朝鮮侵略との関係があり、不徹底であったことも意識したい。・同時に刀狩を通して兵農分離を推し進めたが、必ずしも農民の武装解除ではなかった。こうしたことから、農民は検地帳に名前を書いてもらうか、考えさせる。	秀吉が村に役人を派遣し、検地や刀狩を始めた。社会や文化はどう変わっていくのだろうか。

40	(6) 僧が見た朝鮮の民衆	<ul style="list-style-type: none"> ・豊臣秀吉の朝鮮侵略戦争には、秀吉と朝鮮王朝（明を含む）の矛盾の他に、秀吉と朝鮮民衆や戦争に狩り出された日本の民衆、秀吉と日本の大名たち、さらには朝鮮王朝と朝鮮民衆などさまざまな矛盾が内包されて進行したことを多方面から考えさせたい。 ・特に朝鮮民衆や日本の民衆の姿を追っていくことでこの戦争の本質がとらえられる。 ・戦争のなかで当時の人びとがどのようなことを考えていたか想像させる。 	日本の大軍が朝鮮に攻めこんだ。突然攻めこまれた朝鮮の人びとはどうしたか考える。
41	(7) 江戸の町づくり	<ul style="list-style-type: none"> ・徳川将軍3代による江戸の町づくりの経過をたどる。江戸幕府が大名に土木工事を割り当て（普請＝軍役）、大名は家来の武士を通じて職人や農民を動員したことに気づかせ、巨大プロジェクトが可能になった社会のしくみに目を向けさせる。 	江戸の町はどのようにつくられたのか。誰が企画し、誰がどのような工事をしたのか、現場では誰がどのような作業をしたのか、追究していく。
42	(8) 日本町が消える	<ul style="list-style-type: none"> ・朱印船貿易は、東アジア海上交易に進出したヨーロッパの国々と競うほどになったが、30年ほどでアジア各地にできた日本町が消滅する。なぜ、日本町が消えたのか。国内事情の変化による幕府の外交方針の大転換を考えさせたい。 ・江戸時代の対外関係が閉じられたイメージの「鎖国」ではなく、四つの口を通して東アジアやアイヌの人びととの緊密に結びついた対外関係であったことに気づかせたい。 	日本町はなぜ消えていったのか。幕府の外交政策はどう変化していくのだろう。

第5章 百姓と町人の世

43	(1) 武士のいない村	<ul style="list-style-type: none"> ・江戸時代の村の特色は、村に住む人達は百姓で、武士は村に住んでいないことにある。村が年貢納入を請け負える力をつけている中で、幕府や藩がどのように村を支配し、年貢をとりたてたのか、村の人々の動きに目を向けさせる。 ・米こしらえの作業を体験させる。 ・江戸時代はジェンダーと様々な身分によって成り立つ社会であることに気づかせ、なぜ、幕府は、いくつもの身分のものさしがある身分制をしいたかを考えさせたい。 	米こしらえとは、何をするのか。人々は年貢など村の運営をどのようにやっていたのか。
44	(2) 綿花と底ぬけタンゴ	<ul style="list-style-type: none"> ・綿の栽培への百姓の意欲が底ぬけタンゴという道具を生み出していることに目を向けさせる。 ・綿花生産が別の商品作物を生み出し、貨幣経済の浸透を促したことに気づかせる。 ・木綿が衣料の他にどのような分野に影響を与えたかを考えさせる。 	底抜けタンゴにはどんな工夫があるか。それで栽培された綿花（木綿）は、暮らしをどう変えていったか。

45	(3) 刀より金銀の力	<ul style="list-style-type: none"> ・国内の治安が安定すると、全国的な交通が可能になり、「天下の台所」大阪を中心に商業が発達したことに注目させたい。 ・商人たちが財力を蓄える工夫に注目させるとともに、武士をしのぐ財力をもとに町人文化を担った彼らの自負心を着物を例に想像させたい。 ・町人の立場になって西鶴の小説、歌舞伎、人形浄瑠璃、俳諧などに夢中になる理由を考えさせたい。 	金銀の力が刀より上とは、どういうことか。そういう時代にはどんな文化が生み出されたか考える。
46	(4) 北の海から来た昆布	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒たちの目を、北方のアイヌの人びとの暮らしに向けていきたい。そのために昆布採りの労働、交易の姿を具体化するとともに、その収奪を図る和人ととの戦いへつなげたい。 ・その昆布が日本各地へ運ばれる状況を見ながら、列島の北から南へ、さらに海外への流通の様子に気づかせたい。 	アイヌの人びとの暮らし、それを脅かすものとのたたかいに目を向け、昆布を例として、アイヌの人びとを起点とする流通のルートを追う。
47	(5) 江戸に行く朝鮮通信使	<ul style="list-style-type: none"> ・朝鮮と正式な国交を結んでいたことから、朝鮮通信使という教材は、いわゆる「鎖国」概念を再検討させる役割を果たす。 ・通信使一行と日本の儒学者の交流は、各地に祭や人形などの形で伝えられていることの意味を合わせて考えさせたい。 ・具体的な行列の様相や申維翰と雨森芳洲の会話を通して、幕府の意図をとらえさせたい。 	朝鮮通信使が大阪から江戸までの陸路を2000人の行列をつくって進んだ。朝鮮はどうして通信使を送ったのか、幕府はなぜそれを受け入れたのか、そして民衆は通信使の行列をどのように迎えたか、考える。
48	(6) 将軍吉宗のなげき	<ul style="list-style-type: none"> ・18世紀、5代将軍綱吉の時代以降、悪政と善政が交互に行われたと捉えるのではなく、社会の変化に対応した特徴ある政治が行われたことを理解させたい。 ・本時では幕府財政再建を中心に綱吉の政治、享保の改革、田沼の政治を扱う。前の政治と改革の政治が断絶していたのではなく、継続していたことに留意して授業を進める。 ・実際の財政再建の担い手はだれなのかを考えさせたい。また幕府同様、財政難に陥っていた諸藩がどのような政治をしたのか考えさせて、次の寛政の改革につなぐ。 	砂糖が国産化されていく。将軍吉宗、田沼意次はどんな考えでどんな取りくみをしたのか。
49	(7) 裏長屋に住む棒手振	<ul style="list-style-type: none"> ・大都市江戸のメインストリートを描いた『瀬代勝覧』を読み解くことで、店と行商人の商業活動に目を向けさせ、特に棒手振とよばれた人びとの仕事、暮らしとその果たした役割について考えさせたい。 	棒手振とは、どのような人びとか。どこに住み、どんな仕事をしていたのか、追究していく。

50	(8) 地鳴り山鳴り、のぼりを立て	<ul style="list-style-type: none"> ・19世紀の庄内藩の百姓一揆から、百姓たちの要求とそれを勝ち取っていった行動と工夫を見る。 ・17世紀の白岩一揆、18世紀の郡上一揆から、厳しい処罰の現実と百姓たちの成長に気づかせたい。 ・百姓たちの願いは何だったか考えさせる。 	<p>百姓一揆は武器を持たず、行動のきまりをつくった。そこに見える百姓たちの願いを考えてみよう。</p>
51	(9) 人体解剖の驚き	<ul style="list-style-type: none"> ・1773年、『解体新書』が完成した。いかに権威ある通説であっても疑問を持ち、確かめる必要があることを杉田玄白らが実証した経緯をたどり、その苦勞を知らせたい。 ・蘭学をはじめとする、新しい学問への人々の情熱を伝えたい。 ・学問や科学の発展に必要な環境や条件とは何か、ということについても考えたい。 	<p>はじめて解剖を見た医師たちの驚きとは、どんなものか。それは学問をどのように発展させたか。</p>
52	(10) 寺子屋の子どもたち	<ul style="list-style-type: none"> ・寺子屋の様子を、コラムや図版を見ながら想像させ、読み書きがなぜ広がっていったか。考えさせたい。 ・この時代、庶民に文化が広がり、どんなに身近になっていったか図版や本文を見て、気づいたことを発表しあい、この時代の文化に興味を持たせたい。 	<p>寺子屋の先生と子どもたちのようすを想像しよう。どんな文化に接するようになるのか。</p>
53	(11) 北からの黒船	<ul style="list-style-type: none"> ・ロシアがシベリアを征服し、北太平洋では列強による毛皮貿易の競争が始まる。そうした中、ロシア船が来航し、日本との貿易を求めた。寛政の改革を進める幕府はどう対応したのか。18世紀末の世界史の動向を、先住民を視野に入れつつ考えさせたい。 	<p>ロシア船が蝦夷地に来た。どのような目的で来たのか。幕府はどう対応したのか。先住民のアイヌの生活にも目を向けつつ、その政策の是非を考える。</p>
54	(12) 外に危機、内にも悩み	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもたちとの年齢が近いジョン・万次郎の異国の地でたくましく生きぬく意志の強さから、子どもたちの「共感」を呼び起こしたい。 ・万次郎が遭難した1841年は、アヘン戦争の最中であり、天保の改革がはじまり、渡辺崋山が自害している。また万次郎がホノルルで帰国の準備をしていた1850年には高野長英が捕まり自刃し、万次郎が母と再会した翌年1853年、ペリーが来航した。この時期に少年万次郎が自ら切り開いた運命を、欧米諸国がアジア・太平洋地域に進出する大きな動きや日本の対応のなかでとらえたい。 	<p>14歳の少年がアメリカに渡ったころ、日本近海で何が起きていたか、蘭学者と幕府はどうしたか。</p>

第4部 近代

第6章 世界は近代へ

55	(1) アメリカの大地に生きる	<ul style="list-style-type: none">・アメリカの先住民を侵略を受ける受動的な存在としてではなく、歴史の主体として、生活と文化、ヨーロッパ人との交易、政治システムなどを見ていく。・独立戦争とアメリカ合衆国の成立は、先住民の側から見てどのようなことだったのか、イロコイ連合やチェロキーの選択や行動を通して考えさせたい。	農業を営み代表会議も開いていたインディアンの土地に、どうやって合衆国を成立させたのか。
56	(2) パスチューユを攻撃せよ	<ul style="list-style-type: none">・フランス革命の原因や進行を見るなかで、どのように政治や社会が変わっていったかを考えさせる。・革命の中での女性のたたかいに目を向け、フランス革命や人権宣言を、女性をはじめさまざまな人たちの立場から考えさせる。・革命により地方にも法が貫徹され、国民国家が形成されていくことに気づかせたい。	パスチューユを襲撃、村々では一揆。このあと、フランス革命はどのように進んでいくか。
57	(3) 工場で働く子どもたち	<ul style="list-style-type: none">・産業革命は、手工業から工場制機械工業へと生産の方法を変えた変革であり、生産力の飛躍的な発達をもたらした。機械と発明者の名の暗記ではなく、技術の変革を具体的に理解させたい。・産業革命によって、生産手段を私有し利潤を追求する資本家と自らの労働力を売る以外にない労働者という二つの階級が生まれ、資本主義社会が成立した。児童労働の実態から資本主義のしくみに迫りたい。また、過労死、非正規労働、ブラック企業など現在の問題とつなげて考えさせたい。	ミュール紡績機を使う紡績工場で働くプリンコウとメアリという子どもの労働者に注目し、なぜ子どもが働かされるのかを考える。子どもの労働者が集会に参加する姿を追い、人間らしい暮らしと労働条件を求めて、労働運動が行われたことを理解する。

58	(4) グリム兄弟の願い	<ul style="list-style-type: none"> ・近代の国民国家が、人びとに国民という帰属意識をもたせながら形成されていく過程をみていく。 ・ヨーロッパでは、宗教や家柄が人間を区別する上で重要とされた。教養人の共通語はラテン語かフランス語であり、住む地域や言葉の違いは大きな問題ではなかった。こうした中、フランス占領下にドイツ語で童話を広めたグリムの願いについて考える。 ・大学教授や政治家になったグリムはどんな国を求めたのか、グリムの願いについて考える。 ・幕末にグリムを訪ねた日本人がいた。どんなことを話したか想像し、日本とのつながりを考えたい。 	グリム兄弟はなぜドイツ語の童話を広めたのか、そのころヨーロッパでどんな動きがあったのか。
59	(5) アヘンを持ち込むな	<ul style="list-style-type: none"> ・アヘン戦争の諸事実のうち、生徒が目を向けやすいのは、アヘンの害毒とそれに対する中国側のアヘン没収、「焼却」(化学的処理)という強行策だろう。ここを授業の中心に据えたい。 ・だが強行策は、イギリスとの軍事対決へと展開し、南京条約という結末となる。強硬策は好ましい結果にならなかったが、これをどう見るか考えさせたい。 	イギリスのアヘン大量密輸に対する中国の強行策を紹介し、戦争の展開、南京条約への経過をたどり、中国のアヘンへの対応の是非を検討する。
60	(6) インド大反乱と太平天国	<ul style="list-style-type: none"> ・世界中に綿織物・更紗を輸出していたインドは、イギリスによる植民地化によって、その基盤を崩された。中国もアヘン戦争ののち、欧米勢力の進出で民衆の暮らしは悪化していた。だが、インドでも中国でも、それに対する民衆の抵抗運動がおこる。植民地化は民族運動を必然化させることを実感させる。 	イギリスの植民地化に対してインドで、また、欧米勢力の進出が盛んな中国で、それに抵抗する運動はどのように起きたかに目を向けさせる。
61	(7) 黒船を見に行こう	<ul style="list-style-type: none"> ・江戸湾にあらわれた黒船。幕府のみならず、庶民の関心の高さに目を向け、当時の日本人が黒船来航をどう受け止めたか考えさせる。 ・幕府の対応と通商条約を結ぶ過程を見ながら、日本の政治・社会がどう変化していくか考えさせる。 	人びとはなぜ黒船見物に行くのだろうか。黒船が来て幕府・大名、一般の人々はどう反応したか。
62	(8) 横浜港のにぎわい	<ul style="list-style-type: none"> ・横浜の様子や商人の活動、生糸や木綿の生産地の動き、物価の動向などの事実を理解させ、それらの情報をもとに、開港は幕末の人びとの生活にどんな影響を与えたのかを考えさせたい。 ・尊王攘夷運動が盛んになり、朝廷が幕府に攘夷の実行をせまった結果、外国との紛争や戦争が起こったことを把握させ、その原因となった藩の対応について考えさせたい。 	貿易がはじまると人びとの暮らしはようになったか考える。さらに、外国との紛争や戦争はなぜ起きたのか、その結果長州藩や薩摩藩にどのような変化が生じたのか考える。

63	(9) 打ちよせる世直しの波	<ul style="list-style-type: none"> ・開港のあと、江戸や大阪といった大都市で打ちこわしが頻発し、世直し(世均し)を求め一揆として拡大していった。打ちこわしや世直し一揆が強奪ではなく、正義や平等、助け合いといった思想にもとづいて行われたことを図版や本文から読み取らせたい。 	世直しに参加した人びとは何を求めたのか、長州との戦争で、幕府はなぜ負けたのかを考える。
64	(10) 大政奉還のゆくえ	<ul style="list-style-type: none"> ・「ええじゃないか」がなぜ大流行したのかを考えることによって、当時の人びとの不満や願望などを想起させたい。 ・戊辰戦争の勝敗を左右した要因は、両軍の兵器の格差であるとされる。しかし、「新政府軍はなぜ幕府軍に勝ったのか」というテーマを考えるときには、兵器の違いだけでなく、新政府が人びとの支持を得ようと気を配っていることにも目を向けさせたい。 	「ええじゃないか」はなぜ大流行したのか考える。また、大政奉還後に起こった戊辰戦争で新政府軍はなぜ幕府軍に勝ったのか考える。
第7章 近代国家へと歩む日本			
65	(1) 大名も武士もなくなった	<ul style="list-style-type: none"> ・廃藩置県は軍事力を背景に強行され、諸藩の連合政府から、天皇を頂点として改革派の士族(維新官僚)が権力を握る中央集権国家へと変わる。領主権を持っていた大名が、天皇制国家を支える華族になっていった背景を考えさせたい。 ・古い身分の廃止によって、一元的画一的に国民を支配する枠組みが作られ、以後の政治・社会改革の前提となったことをおさえる。 	藩をなくす、刀もなくす。大名、武士はどう受けとめたか、考える。そして、社会はどう変わっていくのか、追究する。
66	(2) 村に学校ができた	<ul style="list-style-type: none"> ・江戸時代の寺子屋と近代の学校を比較させて、その相違に気づかせたい。 ・学制発布から数年で現在とほぼ同数の小学校が全国に開学した背景としての、各地域の人びとの新しい教育に対する期待と情熱を感じさせたい。 ・学校教育や徴兵制が、国民形成に大きな役割を果たしていったことを理解させる。 	近世の寺子屋と近代の学校を比較したり、寺子屋に子どもを通わせていた村の人びとは学校ができてどうしたかを考えたりすることで、近世から近代への移り変わりを意識し、国民国家が形成されていく道すじを理解する。
67	(3) 632日、世界一周の旅	<ul style="list-style-type: none"> ・岩倉使節団は、大国から学ぶだけでなく小国にも注目し、日本の針路の一つとして検討したことを知る。 ・『三酔人経綸問答』から、日本はどのような国を目指す可能性があったのかを考える。 	岩倉使節団は、世界各地の産業や生活の様子を見て、どんなことを学び、これからの日本をどうしようと考えたのだろうか。

68	(4) 工女は兵士に勝る	<ul style="list-style-type: none"> ・政府主導により「上からの資本主義化」が進められた。富岡製糸場をとりあげ、工女の視点から、工場や機械、労働のようすに目を向けさせる。製糸業は富国強兵のための外貨獲得の産業であったことに気づかせたい。 ・殖産興業政策は、鉄道、通貨、郵便、電信などにも及び、資本主義育成の条件整備が行われた。財源は、地租改正によって生み出された。重い負担をかけられた民衆は、反対一揆をおこした。農民の生活の変化について考えさせたい。 	富岡製糸場の工女の仕事に目を向け、工場長の言葉「工女は兵士に勝る」とは、どういうことを言っているのか、考える。
69	(5) 国会を開こう	<ul style="list-style-type: none"> ・女性の参政権を求める運動をとりあげ、どのような思いで運動したのかを考えさせる。 ・士族・豪農・農民がそれぞれ何を求めて自由民権運動に参加していったかを追究することで、国会開設を求める国民的な運動になったことをつかませる。 	女性の政治への参加や民権運動の演説会のようすからどのような人がどういうことを訴えたのかを考える。
70	(6) 民衆がつくった憲法	<ul style="list-style-type: none"> ・自由民権運動は、各地で私擬憲法をつくり出した。中でも、1968年に発見された「五日市憲法」を取り上げ、どのような特徴を持った憲法草案であったか、そして、それを議論したであろう学芸講談会を通して自由民権運動のようすを考えさせたい。 ・自由民権運動が各地に広がり、その運動がどうなっていったか、考えさせたい。 	五日市の人びとはどのようにして憲法案をつくったか。自由民権運動はどう変わっていくか、考える。
71	(7) 天皇主権の憲法	<ul style="list-style-type: none"> ・憲法制定と議会開設は、自由民権運動の成果であり、同時に政府による支配体制の再編成でもあった。大日本帝国憲法は欽定憲法であり、天皇主権の憲法であったことを押さえておきたい。 ・帝国議会が開かれ、国民の政治参加への道が開かれた。中江兆民の言葉、選挙運動、議会での行動を通じて、その意義と限界を考えさせたい。 	内容を「誰も知らない」のはなぜか、大日本帝国憲法の制定過程を追究する。どんな人が議員になり、議会では、どんなことが問題となったのか。
72	(8) 北・南を組み込み、国境を引く	<ul style="list-style-type: none"> ・日本が蝦夷地を北海道と改め、旧土人保護法などを制定したことはアイヌの人びとの生活にどのような影響を与えたか、考えさせる。 ・一方、琉球王国を併合し、沖縄県を置いたことは、琉球の人びとの生活にどのような影響を与えたか、考えさせる。 ・こうした姿勢が外交関係にも貫かれていたことに気づかせたい。 	蝦夷地や琉球が日本に組み込まれていったことと、清や朝鮮との外交との共通点と違いを考える。

第5部 二つの世界大戦

第8章 帝国主義の時代

73	(1) 日本と清が、朝鮮で	<ul style="list-style-type: none">・日清戦争を日本と清の戦争と狭くとらえる授業が多い。ビゴアの風刺絵「魚つり遊び」を使って日清戦争を考えさせる授業では、朝鮮の主体性に考えを及ぼすことが難しい。・朝鮮王宮の占領から始まる日清戦争という授業構想は、朝鮮をめぐる日本と清の戦争だったという本質をとらえることを容易にする。さらに、東学農民軍が日本軍と熾烈な戦いをくり広げた事実から朝鮮の人のびとの気持ちを考えさせたい。・日清戦争に勝利した日本は台湾を割譲させたが、台湾を植民地とするためにさらに戦争をくり広げなければならなかった。日清戦争に参加した日本の兵士たちは戦場でなにを考えたか想像させ、話し合わせたい。	日本と清の戦争が始まった。日本軍はまずどこに出兵したのか。そこでどんなことをしたか考える。
74	(2) 分割される大陸	<ul style="list-style-type: none">・欧米列強による争奪戦によって地図上でアフリカ分割が行われた。その背景を考えたい。各地域では激しい抵抗が起きた。生活や文化を守ろうとした諸部族の姿に目を向けたい。・列強はさらにアジアの争奪に向かった。義和団による民衆の激しい抵抗が起きた。列強の侵略に日本も加わった。帝国主義の実態を学ばせたい。	ヨーロッパの国々はアフリカにやってきてどのようなことをしたか。また中国では義和団事件鎮圧のためにどうしたか。日本が欧米の国々とともに出兵したのはなぜかを考える
75	(3) 戦場は中国だった	<ul style="list-style-type: none">・日露戦争は朝鮮・満州（中国東北部）をめぐる日本とロシアが戦った帝国主義戦争であり、戦場とされた中国、兵站基地とされた朝鮮（大韓帝国）の民衆に大きな被害をもたらしたことに目を向けたい。・日英米対露仏独という列強グループの対立（国際政治）、塹壕戦や機関銃を使った戦術（軍事史）、人と物を総動員する総力戦という観点から世界史的な意義を持つ戦争であり、「第0次世界大戦」とよぶ見解があることを押さえておきたい。	日本とロシアはどこで戦ったか。両国では民衆の暮らしはどうなったか。戦争を続けられるのか。兵士、民衆の視点から戦争の実相を追究する。
76	(4) 国語をつくる	<ul style="list-style-type: none">・国民づくりには国語の確定が欠かせない。さらに台湾植民地経営にも欠かせない国語をつくり出すために、どんな努力があったか、考えさせる。・大勢の子どもたちが学校に通うようになったが、学校で何を学び、どんなことを考えていたか、想像させたい。	学校で唱歌や軍歌を教えるようになり、国語もつくられた。学校に通う子どもたちは何を思いながら勉強したか、考える。

77	(5) 土地を奪われた朝鮮の農民	<ul style="list-style-type: none"> ・1910年、日本は韓国を併合した。総督府を置き、憲兵警察を配置して支配した。その内実を、土地調査事業や日本語教育などから考えさせる。とくに、植民地朝鮮の人びとが、日本の支配や在朝日本人に対してどう思っていたか想像させる。 	朝鮮の村に東洋拓殖会社の社員が入ってきた。朝鮮総督府による支配はどんなものだったか考える。
78	(6) 生糸と鉄	<ul style="list-style-type: none"> ・製糸工女の労働実態とその背景を資料から考察し、資本主義の成立を人びとの姿を通して考えさせる。 ・産業革命の進展と財閥について理解させる。戦争との関係にも気づかせたい。 	冬の野麦峠を少女たちが越えていく。生糸の輸出が増え、日本の産業や社会はどう変化したか。
79	(7) すべての力を戦争へ	<ul style="list-style-type: none"> ・第一次世界大戦は、欧州列強が最新技術の粋を集めた総力戦であり、それは地獄のような戦場を意味したことを、兵士の手紙から考えさせたい。 ・欧州列強は、自国民の総動員だけでは足りず、植民地からの人や物の動員なくして戦争を継続できなかったこと、植民地も戦場になったこと、それまでの戦争と全く違う戦争になったことを考えさせたい。 	第一次世界大戦が始まった。次々に新しい兵器が登場し、兵士たちはどんな戦いをしたのか。
80	(8) 21カ条は認めない	<ul style="list-style-type: none"> ・日本の第一次世界大戦参戦の目的は、中国、特に満州での権益維持・拡張という事実を確認する。 ・大戦中の日本の行動と21カ条要求の内容を中華民国の人びとがどう受け止めたかを考えさせる。 ・大戦中の日本の行動が、その後の国際関係にどのような影響を与えたかを考えさせる。 	北京で学生たちは何を訴えたのか。このころ中国は内外のどんな課題に直面していたのか。
81	(9) パンを、平和を、土地を	<ul style="list-style-type: none"> ・食糧、平和、土地を求める人々の願いが、休戦につながったという視点を提示する。 ・レーニンたちの思想が、当時の世界の人々になぜ受け入れられたのかを考えさせる。 ・大戦終結後、軍縮と平和への努力が重ねられたこと、世界各地で民族自決や民主化を求める動きが高まったことにも目を向けさせる。 	ロシアの女性たちは何を訴え、ロシアはどうなったのか。大戦後、世界の人々は何を願ったのか。
82	(10) 独立マンセー	<ul style="list-style-type: none"> ・1919年3月1日に始まった独立運動は朝鮮全土に広がった。各地で繰り広げられた運動は、地域の要求に基づいて多くの民衆が参加した。 ・この運動のなかで当時の人びとがどのようなことを考えていたか想像させ、独立の本質に迫らせたい。浅川巧の考えとも関連させたい。 	朝鮮各地で「独立マンセー」の声が上がる。インドの自治を求める動きを考えながら、朝鮮の人びとの要求を想像させる。

83	(11) 始まりは女一揆	<ul style="list-style-type: none"> ・米騒動がかつてない規模の民衆運動になった理由を考えさせる。新聞の影響力にも気づかせたい。 ・米騒動を転機とする労働運動や農民運動の発展を理解させる。民衆の成長に目を向けさせたい。 	富山の女性たちが米屋に押しかけた。何をもとめたのか。なぜ米騒動は全国に広がったのか。
84	(12) 女性は太陽だった	<ul style="list-style-type: none"> ・女性のおかれていた状況と社会の変化を背景に女性運動の進展を見る。人びとの願いを考えさせたい。 ・平等を求める社会運動が進む一方で、関東大震災時の朝鮮人虐殺が起きた理由を考えさせたい。 	平塚らいてうは、元始、女性は太陽だったと宣言した。権利を求める運動はどう広がっていくか。
85	(13) デモクラシーの波	<ul style="list-style-type: none"> ・男子普通選挙の実現と第一回総選挙のようすを、世界の民主主義の高まりを背景に見ていく。 ・一票を手にしなかった女性や植民地の人びとの願いと重ね合わせて、民主主義の歴史を考えさせたい。 	普通選挙を求める声が高まる。どんな人びとが求めたのか。普通選挙は実現したのか。
第9章 第二次世界大戦の時代			
86	(1) チャップリンが来た	<ul style="list-style-type: none"> ・1920年代、アメリカ経済は空前の繁栄をとげ、大量消費社会を実現した。自動車社会が到来し、家庭電化製品も普及していく。今も影響力が大きいアメリカの生活様式について考えさせる。貧富の差や労働者の生活にも目を向けさせたい。 ・日本でも、1920年代には都市中間層がひろく形成され、働く女性も増えていった。新聞・雑誌・ラジオ・映画・流行歌などに象徴される大衆文化が普及していくようすを具体的につかませたい。 	ミッキーマウスとチャップリンを切り口にして、アメリカはどんな社会になったのか、考える。そのころ日本では何が人気だったか、新しい文化に目を向ける。
87	(2) 世界中が不景気だ	<ul style="list-style-type: none"> ・アメリカで、さらに日本でも、不景気—世界恐慌の下での人びとの状況を具体的に提示して、それを切実に受け止められるような授業にしたい。 	キングコングはなぜ超高層ビルで吼えたのか。その背景として、世界で、日本で何が起きていたか、不景気の下、人びとの苦境の様相を探っていく。
88	(3) ヒトラーの独裁が始まる	<ul style="list-style-type: none"> ・ファシズムは、人びとの日常に具体的に現れる。子どもにとってその一場面は、ヒトラー・ユーゲントだ。加入を義務づけるねらいは何か。そこからヒトラー独裁体制の生成過程、さらにはユダヤ人迫害の具体像を追求させたい。 	ヒトラー・ユーゲント加入義務のねらいを考え、それを進めた独裁体制の形成過程を追求する。そこからユダヤ人迫害の具体的場面に目を向けていく。

89	(4) 鉄道爆破から始まった	<ul style="list-style-type: none"> ・張作霖爆殺、山東出兵、満州事変と続く日本の中国侵略は中国国民革命の進展に対する日本側の権益擁護・拡大のための軍事行動だった。図版2の地図は、中国国民革命vs日本の侵略という構図を示している。授業の筋道もこの構図に基づいた形にしたい。 	日本軍は、2回にわたり鉄道爆破を行った。そのねらいを考え、その後の日本の行動を、満州国建国、それに対する中国国民政府の連盟提訴を中心に追究する。
90	(5) 問答無用、撃て	<ul style="list-style-type: none"> ・五・一五事件、二・二六事件など、軍人によるテロ、反乱に関しては背景には深入りせず、事件の経過中心の授業にしたい。むしろこれらの事件とかれらの言葉「問答無用」によって、以後の政治や社会がどのように変化していくか。そこに目を向けさせたい。 	五・一五事件、二・二六事件の経過をみながら、問答無用の意味を考えさせ、その後、日本でどんなことが起きたか、その状況を追求する。
91	(6) 戦火は上海、南京、重慶へ	<ul style="list-style-type: none"> ・上海、南京、重慶での日本軍の行為を見れば、「日本はなぜこんなことをするのか」という疑問が出てくる。そこでは、山東出兵・満州事変以来の日本の侵略に対する中国の抵抗が強まり、それを打ち砕こうと、さらに侵略を拡大するという構図が見えてくる。日中戦争とは、<日本の侵略>対<中国の抵抗>であることに気づかせたい。 	上海・南京戦など日本の侵略戦争が拡大していく状況をとらえると同時に、中国側の抵抗もより強化されることに目を向ける。
92	(7) 戦火に追われる人びと	<ul style="list-style-type: none"> ・第二次世界大戦の「経過」よりも、「戦火に追われる人びと」に焦点をあてたい。ドイツ軍に占領されたポーランドやソ連では、人びとの身の上になんかことが起きていたか。無差別爆撃としての空襲は、どれだけ人びとを苦しめたか。そういう観点から第二次世界大戦を見ていきたい。 	ドイツ軍の侵攻、英米独による無差別爆撃の状況を見て、戦火に追われる人びとの姿から、第二次世界大戦を考える。
93	(8) 東南アジアの日本軍	<ul style="list-style-type: none"> ・9章(6)で学んだ日中戦争が泥沼化していた状況に触れ、日本がアジア太平洋戦争を始めたのはなぜか、その目的と実相を学び、侵略されたアジアの人びとの側から戦争を見つめ考えさせたい。 	日本軍はマレー半島とハワイ攻撃の後、東南アジア各地でどんなことをしたのか。現地の人びとの暮らしはどのように変わったのだろうか。日本が掲げた「大東亜共栄圏」の実態を学び、想像してみよう。
94	(9) 戦争と二人の少女	<ul style="list-style-type: none"> ・アンネ=フランクの隠れ家生活を通して、ユダヤ人への迫害・絶滅政策を知る。隠れ家のアンネたちを支えた人たちにも目を向けさせたい。 ・オードリー=ヘプバーンの生活を通して、ドイツ占領下のオランダの状況と抵抗運動について学ぶ。 ・アウシュビッツ収容所の苛烈な事実を知り、これを学ぶ意味を考えさせたい。 	オランダにいた少女たち。オードリーはどんなことをしたか。アンネはどこへ連れていかれたか。ユダヤ人虐殺はなぜ起きたのか考えよう。

95	(10) 赤紙が来た	<ul style="list-style-type: none"> ・政府が物資も言論・思想も、学校教育も統制していた実態をモノ教材や写真、証言を使ってリアルに再現し、民衆にとっての戦争を追体験させたい。 ・徴兵され前線に行く兵士、銃後の女性はどうな役割をはたしたのか。「加害」「被害」「加担」「抵抗」の4つの面を意識して授業をつくり、「加害者になるところまで苦しめられ追いつめられた被害者」（黒羽清隆）の姿を提示し、民衆の「善意、真面目さ」をどう見るか、考えさせたい。 	戦時下の民衆の生活に目を向ける。戦場に行く兵士、銃後で働く女性、学校で学ぶ子どもたちはどんな体験をしたか。具体的な事例を通じて追体験する。民衆の一人ひとりの行動と行為が政府・軍の推し進める戦争とどう関わっていたのか追究する。
96	(11) 餓死、玉砕、特攻隊	<ul style="list-style-type: none"> ・米英との開戦後、日本は半年で太平洋の島々をオーストラリア近くまで占領したが、ミッドウェー海戦敗戦から米軍の猛反撃を受けることになった。 ・日本軍首脳部の戦いに対する考え方を餓死、玉砕、特攻隊をもとに考えさせる。 ・十代の少年飛行兵が特攻に志願したのはなぜか、9章(10)「赤紙が来た」もふり返り、考えさせたい。 	ガダルカナルやサイパンで日本兵はどのように戦ったのか。特攻隊の死をどう見るか。
97	(12) 町は火の海	<ul style="list-style-type: none"> ・本土空襲の危機が迫り、都市部の学童疎開が強行された。が、疎開から排除された多くの子どもたち（残留組）は空襲＝無差別爆撃の犠牲となった。一方、疎開組は極度の体力低下に陥り、空襲の激化で家も家族も失う子どもが続出した。 ・本土決戦体制のもとでは、部隊や工場の移動に伴い、再疎開、再々疎開を余儀なくされ、疎开学童は難民化を強いられた。疎開・空襲・本土決戦体制を、このように連関させ一体のものとして考えさせたい。 	学童集団疎開の「疎開組」と「残留組」、それぞれの子どもの様子を見ながら、空襲が現実になると、両者にどんな問題が生じたか、学童疎開は子どもの命を守ったのか、考える。
98	(13) 荒れ狂う鉄の暴風	<ul style="list-style-type: none"> ・沖縄戦での住民の多大な犠牲は、米軍の猛攻によるものであるが、友軍である日本兵との関わりの中で生じたものが多い。この事実を授業の中心にしたい。 	米軍の猛攻撃一鉄の暴風のなか、沖縄住民にどんなことが降りかかったか。そのとき日本兵は、どんなことをしたか。その事実を見て、日本軍は何のために戦ったのか、考えさせたい。
99	(14) にんげんをかえせ	<ul style="list-style-type: none"> ・被曝の実態―残虐性を人びとの姿の中に見ることによって、それを強行した加害者側の意図を問う、という筋道の授業にしたい。 ・原爆体験は、加藤義典氏のように現在もなお、深い傷となって疼いている。授業は、その現在の地点から、あの時点での人びとの姿を見る形で進めたい。 	原爆投下による、人びとの被害の状況を具体的につかむ。そのことによって、疑問として浮かび上がる、アメリカの投下目的を考える。

100	(15) 本土決戦か、降伏か	<ul style="list-style-type: none"> ・本土決戦体制から、ポツダム宣言受諾一降伏・敗戦に至る経過を追いながら、そのなかで、人びとはどのような状況に置かれたか。さらに敗戦に際して、「帰国」が困難になる状況に目を向けさせたい。 	<p>本土決戦になると、中学生たちは何をするのか。そこからどのようにしてポツダム宣言受諾一降伏・敗戦に至ったのか、その経過を追いながら、そのなかで人びとが直面した事態に目を向けさせる。</p>
第6部 現代			
第10章 現代の日本と世界			
101	(1) 焼け跡からの出発	<ul style="list-style-type: none"> ・衆議院議員選挙に立候補した女性たちや食糧メーデーで発言した子どもを通して人びとの願いと行動を知り、社会の変化を具体的にとらえさせる。 ・占領下の大きな変革を理解させる。敵国であったアメリカの占領政策を、多くの人びとがなぜ歓迎したのか考えさせたい。 	<p>焼け跡で街頭演説が始まった。人びとはどんな願いをもっていたか。GHQは何をしようとしたか。</p>
102	(2) もう戦争はしない	<ul style="list-style-type: none"> ・人びとが憲法をどのような思いで迎え、憲法制定過程でどのような願いを込めたのか考えさせる。 ・憲法の制定過程を知る。憲法の外におかれた沖縄や、新憲法のもとで逆に権利を奪われた旧植民地出身の人びとの思いにも目を向けさせたい。 	<p>いろいろな憲法案が発表された。日本の新しい憲法にふさわしいのはどれだろう。</p>
103	(3) 走れ、ぞう列車	<ul style="list-style-type: none"> ・戦時猛獣処分の命令がだされた目的を考えさせ、その中での動物園関係者の努力を伝える。 ・「ぞう列車」を実現させた「子供議会」の活動や、それを支援した大人たちの動きを学び、それを可能にした背景には、日本国憲法、戦後の新しい教育制度があったことに気づかせる。 ・戦後の新たな子どもたちの活動の一方で、戦争の被害者である戦争孤児の存在にも目を向けさせる。 	<p>ぞうを見たい。子どもたちはどんな行動を起こしたか。学校はどう変わっていったのか。</p>
104	(4) 南北に引き裂かれる	<ul style="list-style-type: none"> ・1945年8月に解放を迎えた朝鮮で新国家建設へ向けて動き出したことの意味を考えさせる。 ・米ソの占領下で二つに分かれた朝鮮の武力統一を掲げて北朝鮮が韓国に侵攻したことが、何をもたらしたか、考えさせる。 ・戦争のなかで当時の人びとがどのようなことを考えていたか想像させることで、戦争の本質に迫らせたい。 	<p>朝鮮半島では同じ民族が二つに分かれ、戦争を始めた。戦争の中で当時の人びとが何を考えていたか想像する。</p>

105	(5) インドも中国も来なかった	<ul style="list-style-type: none"> ・サンフランシスコ講和条約と日米安保条約の締結によって、日本はアメリカ合衆国の冷戦戦略に組み込まれた。この日本が選んだ道は今日までどのような影響をもたらしたか、「もう一つの道」はありえたのかを含めて考えさせたい。 	サンフランシスコで2つの条約がむすばれた。どんなことが取り決められたのか。アメリカ、ソ連、インド、中国などはそれをどう評価したか、沖縄の人、旧千島の住民はどう受けとめたか。
106	(6) ゴジラの怒り、サダコの願い	<ul style="list-style-type: none"> ・第五福竜丸事件は「原爆を許すまじ」との思いを呼び起こし、原水爆禁止運動が広がった。運動に関わった人びとやサダコの思いに迫りたい。 ・福島原発事故をふまえ、「被爆国がなぜ原発大国になったのか？ヒロシマはなぜフクシマを止められなかったのか？」（加納実紀代『ヒロシマとフクシマのあいだ』インパクト出版）と問いかける。1953年以降、アメリカ発の「原子力の平和利用」キャンペーンが行なわれ、原爆＝悪、原発＝善と使い分ける論理が国民の意識に浸透していった。「ヒロシマとフクシマのあいだ」をつないだ論理を考えさせたい。 	映画『ゴジラ』が大ヒットしたのはなぜだろう。人びとは原水爆と原子力発電をどう考えていたのか、追究する。
107	(7) 国会を包囲する人波	<ul style="list-style-type: none"> ・1960年、岸信介政権が日米安保条約改定案を国会で強行採決すると、多くの市民、労働者、学生が国会を包囲した。これは日本の針路をめぐる二つの路線、日本国憲法優先と日米安保優先との対立であったことに気づかせ、沖縄も視野に入れて考えさせたい。 	政府（岸政権）はなぜ安保条約の改定を目指したのか。なぜ、多くの人びとが国会を包囲して抗議の声をあげたのかを考える。
108	(8) 豊かさとその代償	<ul style="list-style-type: none"> ・1960年代の高度経済成長は、家電・マイカーなど豊かな国民生活をもたらした。大量生産・消費・廃棄のしくみがどのように生み出されたか考えさせたい。 ・農村の過疎、都市の過密が生じ、深刻な公害問題やゴミ問題が発生したことに目を向けさせたい。 	家電製品は生活をどう変えたか。その原材料の生産の過程で公害が引き起こされていたことを学ぶ。
109	(9) 第三世界と東西陣営	<ul style="list-style-type: none"> ・1960年代、東西の対立が続く中、アフリカ諸国の独立が続き、第三世界の解放と平和を求める運動が高まった。世界政治の動向の中心はベトナム戦争だった。国家や個人がどう関わったのか考えさせたい。 	東京オリンピックを切り口に、東西対立、アフリカの独立、「プラハの春」を学ぶ。ベトナム戦争の経過を知り、若者が歌や行動で何を訴えようとしたのかを考える。

110	(10) 基地の中の沖縄	<ul style="list-style-type: none"> ・「基地の中に沖縄がある」といわれる実態を、嘉手納基地建設の歴史を具体例にして学習する。 ・1972年に沖縄の本土復帰、日本政府が発表した「核抜き本土なみ」は守られたのか、追究する。 ・少女暴行事件、米軍ヘリ墜落事故、辺野古新基地建設など問題は深刻さを増している。沖縄の声を聞き、どうしたらいいか考えさせたい。 	<p>嘉手納付近の地図を読みとり、基地がつけられた経緯と現状をつかむ。日本への復帰の経緯をたどり、「核抜き本土なみ」の約束は守られたのかを考える。</p>
111	(11) パレスチナの平和	<ul style="list-style-type: none"> ・パレスチナの地にイスラエルという国家がつけられた結果、480万人もの人びとが難民となった。第二次世界大戦中のユダヤ人虐殺を思い起こしながら、建国と難民の関係を考えさせる。 ・その後、イスラエルが武力で抑えても、パレスチナ人は独自の国家をつくらうとするのはなぜか、考えさせたい。 ・パレスチナとイスラエルの人びとがどのようなことを考えているか、想像させる。 	<p>イスラエル建国をパレスチナ（アラブ）の人びとはどう受けとめたか。中東戦争は世界にどんな影響を与えたのか、考える。</p>
112	(12) 問い直される戦後	<ul style="list-style-type: none"> ・中国残留日本人孤児の問題を導入として、戦後政策の中で「国家間で解決済み」とされてきた個人への補償はどうあるべきかを考えさせたい。 ・人権を求める世界の流れを、現在の問題につなげて理解したい。 	<p>中国残留日本人孤児が、中国でも帰国後も苦しい生活を送ってきたことを知ろう。戦後政治の中で「国家間で解決済み」とされてきたことに対して「個人への補償」を求め、人権侵害の問い直しに取り組む現在の世界の動きを考えてみよう。</p>
113	(13) 絶えない戦火	<ul style="list-style-type: none"> ・現在でも、人が武器を取って争い合う紛争が、世界各地で起きている。人は、戦争のない世界を望みながらも、戦争をくりかえす。戦争以外の方法はないのかを考えさせたい。 	<p>くりかえされる紛争の解決のために戦争以外はないのか考える。</p>
114	(14) 3月11日午後2時46分	<ul style="list-style-type: none"> ・本時は、3分野を連動させて、多面的に学ぶことができるテーマである。歴史的分野では、自然災害の中でも、古代からくり返されてきた震災が、人びともたらした教訓や変革を学び、記憶が風化する中で、歴史的事象をどのように語り継いでいくかを考えさせたい。 	<p>経験や体験のある者、ない者が、歴史的事象をどのように語り継いでいくかを考える。</p>
115	(15) 感染症に立ち向かう	<ul style="list-style-type: none"> ・新型コロナウイルス感染症のパンデミックで生徒が体験したことを思い出し、1918年のパンデミックと天然痘を根絶したできごとについて考える。 ・パンデミックのなかで難民が増え続けている事実を知り、世界の人びとと共存、共生していくためにどうしたらよいか考えを深める。 	<p>さまざまな感染症が人類を苦しめてきた。感染症にどのように立ち向かえばよいのだろうか。</p>